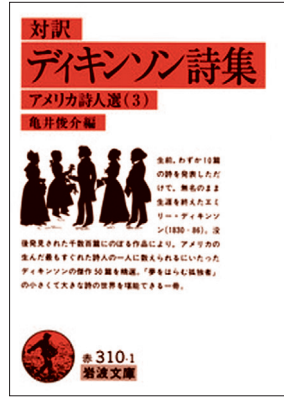


対訳 デイキンソン詩集

エミリー・デイキンソン〔著〕／亀井俊介〔編〕 岩波書店、一九九八年



首都大学東京名誉教授 岡昌之

心理臨床家にとって、言語感覚は命です。それは、古今東西の詩の名作を読むことによっても養われます。次の詩を読んでください。

わたしは「死」のために止まれ
 なかったの——「死」がや
 さしくわたしのために止まって
 くれた——馬車に乗っている
 のはただわたしたち——それ
 と「不滅の生」だけだった。

わたしたちはゆっくり進んだ
 ——彼は急ぐことを知らないし
 /わたしはもう放棄していた/

この世の仕事も余暇もまた、
 彼の親切にこたえるために——

わたしたちは学校を過ぎた、子
 供たちが/休み時間で遊んでい
 た——輪になって——/目を見
 張っている穀物の畝を過ぎた
 ——/沈んでゆく太陽を過ぎた
 ——

いやむしろ——太陽がわたした
 ちを過ぎた——/露が降りて震
 えと冷えを引き寄せた——/わ
 たしのガウンは、蜘蛛の糸織り
 ——/わたしのショールは——
 薄絹にすぎぬので——

わたしたちは止まった/地面が
 盛り上がったような家の前に
 ——/屋根はほとんど見えない
 ——/蛇腹は——土の中——

それから——何世紀もたつ——
 でもしかし/あの日よりも短く

感じる/馬は「永遠」に向かっ
 ているのだと/最初にわたしが
 思ったあの日よりも——

一九世紀のアメリカはニュー・イ
 ングランドの女性詩人、エミリー・
 デイキンソンの「傑作」の一つです。
 死後に発見された原稿で、表題はつ
 いていなかったようです。文庫では、
 最初の一行が表題になっています。

「死」「不滅の生」「永遠」などの言
 葉が鋭角的に迫ってきます。一種ス
 キゾイド的な世界です。ぞくつとし
 ます。彼女の人生の後半は「引きこ
 もり」の日々であったということだ
 す。死後(享年五五歳)に大量の詩
 の草稿が発見され、有名になったの
 です。このあたりの事情は、パスカ
 ルの『パンセ』に似ています。

つまり彼女は、自分自身の精神生
 活のために書いたわけです。その作
 品群が、今ではアメリカの男性の詩
 人ウォルト・ホイットマンと並ぶ大
 詩人の傑作と評価されています。ち

なみにホイットマンは「アウトド
 ア」の詩人として非常に有名です。
 それだけに彼女の元祖「引きこも
 り」の凄みを感じます。味読すれば
 「思春期内閉」の心の理解に役立つ
 でしょう。老年期の理解にも役立ち
 そうです。次の、晩年の詩を読んで
 ください。そして、感受してくださ
 い。訳語が難しいので、原語(英
 語)を参考にするのが良いでしょう。

極楽までの距離なんて/すぐ隣
 りの部屋にすぎない/もしその
 部屋で友が待ちうけているのな
 ら/幸せだろうと不幸だろうと
 ——

何と我慢強いことか魂は、/そ
 んなにも耐えられるなんて/足
 音が近づいてくることに——/
 ドアが開くことに——